

九番ボールはセンターポケットの真ん前、ちよい右あたりで止まった。白球キッボールに軽く右ひねりをくれて突き出せば良い。

「貫ちつたよ。センター……」そういつて突いた。九番はストンと落ちていった。ブルーのラシャを張ったテーブルに残されたのは白球だけだ。九つのボールはすべて、ポケットに消えた。ボーイのスミさんが口惜くちおしそうにエプロンを投げつけると、ふわりと広がって、テーブルにかかった。

「またか、これで八本の負けだ」

黒のスラックスから抜いた財布を手に叩たたきつけて、彼はいった。

八千円——休みの前日に、軽く玉突きを遊んで得る小づかいにしちゃ悪くない。

「ごちー！」

キューをラックに戻していった。

「まったくもう、来なくていいよ、あんたは……。家出娘のケツでも追っかけてなよ」

「明日は休みなのさ、土、日、月曜が祭日だから三連休」

エプロンを外してカウンターに置くといった。終夜営業の玉突屋「R」もだから混んでいる。テーブルは満パイだ。騒がしくて、活気がある。本当はもつと寂しい玉突屋が好き

なのだが。

「幾ら……」

「八百円！」

おしぼりをドンと置いてスミさんはいった。手にブラシを持っている。「R」が終わる午前五時までにはあと三組の客があのテーブルを使うだろう。

まだ、午前零時だ。エレベーターが開いて、ジーンの上下にブーツといった格好のお兄さん方が降りてきてもそういう客の一組だと思った。だが違った。サングラスをしたまま玉突きをやる奴はあまりいない。

「佐久間公つてのは……」

僕の耳にそいつらの一人が息を吹きかけていった。三人のうちの一人だ。振りかえると、ズスタッフ・オブ・クルール・ライダーズズという横文字の縫いとりが目に入ってきた。

ライダーといってもサーフィンのじゃない。

「僕だ」

声をかけた奴は無言で後の二人と顔を見あわせた。可愛かわいがつてくれるつもりなのか。こつちは暴走族をいじった覚えは無い。

「いつしよに来てくれますか」

言葉づかいがいていねいになった。といってサングラスを外すわけでもない。五、六年前日本に来たときマイルス・デイビスがかけていたようなグラスと、レイバンのミラーが二

つ。二十を越えてもいないのに、サングラスをこんなにきめることができるようになるまでいったいどんな努力をしたのだろう。

「どこへ」

「来てくれればわかりますよ」

「歩きかい？」

「いや、自動車で……」

スミさんは少し緊張した顔付きをしていた。

「公……」と声をかけてくる。

「何でもないよ。また来るから」

そういつて、三人とエレベーターに乗りこんだ。声をかけてきた奴のジーパンからオイルの匂いがした。ガソリン・スタンドの息子かもしれない。

## 2

爆音が轟き、排気管が震える。何十ものヘッドライトが放つ光芒が目を貫き、頭の芯をしびれさせる。

寒い。じつと立っていられない。ランチコートの前で腕を組み、足踏みをする。

何人いるのだろう。いや何台か。バイクが二十台はいる。車が十五、六台。一台をのぞく、そのすべてが僕の方に車首を向けている。佐久間公オン・ステージというわけだ。た

った一台がその前に横腹を見せてとまっている。トランザム——真つ赤なトランザムだ。

ブーツにスリムのジーン、スウェードのハーフ・コートを着た奴が車体に背中をあずけ僕を見ている。ハンサムじゃないがいい男だ。ひきしまった浅黒い顔に髭がよく似合う。

スポーツ選手——バンドム級のボクサーのような体つき。ただし、顔はちがう。ボクサーにしてはどこも壊れていない。

僕の背後にとまっていたうちの一台がライトをアップにしたお陰で、左耳から頬にかけて白っぽい傷跡があるのがわかった。目が一瞬まぶしそうに細められ、神経質そうな口元がゆがんだ。今のは、間違いです、というようにライトがすぐ消えるや、その顔の陰に再び目も傷跡も沈んだ。

やんでいた風が再び、強烈に僕の耳をひつばった。痛いなんてものじゃない。言葉を吐こうと口を開くと、ガサガサに乾いた唇から煙草をもぎとっていった。海から来て、海に帰る風だ。オホーツクの寒気団の尖兵かもしれない。生臭く、海の風だと、すぐ知れる。

埠頭まで五百メートルと離れていない。海面も船も見えないが僕にはわかる。煙草がアスファルトに叩きつけられ、火の粉をばあつと散らすと転がっていった。飛んだ火の粉が、男のブーツまで辿りつけずに、風の中で消えた。

「海の風だ、冷たいよ」

トランザムから背中を起こしていった。その瞬間、わめいていた幾つものエンジンが唸るのをやめた。ガソリンを節約することにしたようだ。

「だったら早く話をしようか。タレントじゃないけど、体が元手なんだ」

僕はいい返した。キザにこようというなら、受けて立とう。お互いのポキャブライイが尽きたとき、勝負が決まる。

「捜して欲しいんだ」

口髭のお兄ちゃんはいった。彼のことを、僕をとり囲む連中は、アタマという。最近「支部長」なんて言い方はすたつたようだ。

「女かい」

いった途端、クシャミが出た。僕の負けだ。ハードボイルド・ガイとはまさに君のことさ。

「女だ。年は二十八」アタマはいつて、ニヤリと笑って見せた。得意の笑みに違いはない。年下をビビらすのと、女を転がすには、うってつけの笑いだ。前者は人けの無い駐車場、後者はデイスコのチークタイムがよく似合う。

「恋人かい、姉さんかい」

二十八より彼が若いことは確かだ。答えなかった。半歩踏み出すと僕の顔をじつと見つめた。真剣な顔付きだ。怒ってるのだから、悲しんでいるのだから、わからないような表情だ。

「ついてきてくれ」

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。